

## 幼児期における運動遊びと体育指導に関する一考察

砥堀雅信\*・土田了輔\*・永木耕介\*\*

(平成7年10月31日受理)

### 要 旨

幼児期における体育指導の基本は幼児の行動能力を高めることにありと考えられる。この時期に得た行動能力は、その後の児童期・青年期へとつながり、一生を支配することになるといえる。幼児期における行動能力の多くは「運動遊び」によって獲得することは周知の事実であり、行動能力は行動観察や運動能力テストにより、獲得の量および質を知るのが一般的である。しかし、この時期の運動能力は経年に従い直線的に増大するが、4歳までの発達は未分化で性差がみられないこと、体格、年齢の要素は低年齢ほど運動能力への影響が大きいこと、日常生活における運動遊びの質や量と体格、運動能力との間には相関が見られること等、から行動観察や運動能力テストに加え、身体的特性や遊び環境を含めた幼児の生活全般を総合的にとらえ、体育指導を行うことは、将来の満足できる成長・発達による健康的な生活実現への基礎づくりとして重要であるとする。そこで新潟県南西部に位置するA市（人口約3万人）の保育園に通う4歳児から6歳児（276名～895名）を対象に体格、体型、基礎運動能力、遊び環境、等を横断的、縦断的に調査し、その分析結果から、幼児期における発育・発達の適時性に合致した体育指導の基本的な考え方について検討し、次のような知見を得た。

1. 運動遊びは個々の活動を大切にしながら、行動力を高める指導が大切である。
2. 体格・体型は自らの行動力を高める積極的な因子と行動力を制限する消極的な因子を持っていることから、個々の得意な運動パターンを軸に行動力を高める指導が大切である。
3. 運動能力の獲得は、指導者の幼児に対する見方や運動能力に対する考え方が強く影響する。
4. 指導者は遊び環境の安全性に配慮しながら、工夫された人工的空間や自然的空間で、多くの仲間と自由に多様な遊びができるよう援助することが大切である。

### KEY WORDS

pre-school children	幼児	motor ability	運動能力
playing activity	運動遊び	physical education instruction	体育指導

### 1 は じ め に

幼児期における体育指導の基本は幼児の行動能力を高めることにありと考えられ、この時期に得た行動能力は、その後の児童期・青年期へとつながり、一生を支配することになるとい

\* 生活・健康系教育講座

\*\* 兵庫教育大学実技教育研究指導センター

る。この時期における行動能力の多くは「運動遊び」によって獲得することは周知の事実である。そして、行動能力は行動観察や運動能力テストにより、獲得の量および質を知るのが一般的である。しかし、この時期の基礎的な運動（走、跳、投）能力は加齢に伴い直線的に増大する<sup>1)</sup>ことが知られているものの、4歳までの発達は未分化であり性差がみられないこと、体格、年齢の要素は低年齢ほど運動能力におよぼす影響が大きい<sup>2)</sup>こと、日常生活における運動的遊びの質や量と体格、運動能力との間には相関が見られる<sup>3)</sup>こと等々、年齢や性、身体的特性や遊び環境が個々の行動能力獲得に影響している。

近年、児童期や青年期における体力の低下が指摘されて以来、幼児期の行動能力に関する報告が多くみられるようになった。しかし、その多くは基礎的な運動能力や行動観察から幼児期の特性について検討したもので、且つ、対象地域は大都市およびその周辺が多い。また、横断的なものが多く縦断的なものは少ないといえる。加えて、幼児期の一般的な発育・発達特性からみた指導法は数多くみられるが、調査、分析結果をふまえた指導法に関する報告はほとんどみあたらない。

生涯を健康に過ごすために、個別教育や運動の生活化が強調される今日、幼児の発育・発達に即した適時性を生かした体育指導を行なうためには、調査、分析的研究と同時にそれらを統合、集約し、実践的教育活動に役立つ指導法の研究が重要であることはいうまでもない。

これまで、筆者らは上越地方のA市の幼児を対象に、横断的、縦断的に体格・体型、運動能力、皮下脂肪厚、遊び環境、等幼児の形態や活動および行動にかかわる一連の調査、分析を行い<sup>3)4)5)6)7)8)</sup>いくつかの知見を得た。そこで、これまでの知見をもとに、地域の実態と個性、適時性を考慮した行動力を高めるための体育指導の基本的な考え方について検討を試みた。

## 2 方 法

A市は新潟県上越地域の高田平野最奥部に位置し、人口3万人弱、世帯数約7,400、農業個数約3,000、農業人口約14,000人弱で、最近では工業化も進んでいるが、現況では、いわゆる農村地域である。気象はわが国でも有数の豪雪地域に位置し、過去25年間の最大積雪量は平均2 m、年間積雪日数は平均93日である。以上の概況をもつA市の保育園に通う3歳～6歳児(276名～895名)を対象とし、経年的に体格・体型、運動能力、皮下脂肪厚、遊び環境、等幼児の形態や活動および行動にかかわる一連の調査を行い検討資料とした。

## 3 結 果 と 考 察

### 運動遊びと体育指導

幼児にとって遊びは重要であり、遊びと運動は切り離せない関係にあることや発達段階に応じた適切な運動遊びの必要性については、多くの識者によって強調され、体育的視点によるアプローチも数多くなされてきた。

乳児期から幼児期にかけては、身体の協応能力や平衡能力が急激に発達し、いろいろな運動遊びが行えるようになり、生涯にわたる運動全般の基本となる動作が急速に、且つ、多彩に習得されていく。なかでも、幼児期における精神的、身体的側面の発達は、マイネルが指摘するように、両者は相互に依存する関係を保ちながら一定の順序に従って同時的に発達する。そし

て運動遊びは、この発達を促す重要な役割を果たしている。幼児期に獲得する基本的動作や運動遊びは、生涯にわたる運動への関与や生活化を考えると、その基本となるものである。幼児期における運動能力の開発の観点は遠く、速く、長くよりも、いかに多くの運動パターンを習得し、習熟できたかである。

運動系の発達についてマイネルは、幼児期と園児期（1歳～5歳）は多様な基本的動作が並列的なしかも順次性にそって発達する時期である<sup>9)</sup>と指摘している。また、ギャラハーは、幼児期（3歳～7歳）の運動遊び発達段階が、反射的運動の段階（胎児～新生児）と初歩的運動の段階（2歳頃まで）に続く第3段階であり、基本的運動遊びを多様に獲得する時期である<sup>9)</sup>としている。

運動遊びの分類方法にはいろいろな考え方があり一定しないが、幼児期に発達し、習熟する動きを運動パターンからみると、平衡系（立ち上がる、回る、転がる、等）移動系（のぼる、走る、かくれる、等）操作系（投げる、つく、捕まえる、持ち上げる、等）の3類系に区別されることが多い。これを対象者に実施した基礎運動テストでみると横転がりは平衡系、20m走、立幅跳び、連続片足跳び、熊あるきは移動系、ボール投げは操作系に相当する。

幼児期における運動遊びの基本は子供の行動能力を高めることにあり、この時期に得られた行動能力は、その後の児童期・青年期へとつながり、一生を支配することになる。このことからみると、幼児期における運動遊びは個々の活動を大切にしながら、心身の発達に適應したものでなければならない。そして、当然のことながら、指導者は個々の体力、気力、性格、経験等を考慮しながら心身の発達を援助する魅力的な指導をしなければならないといえる。

### 体格・体型の特徴と体育指導

体格・体型の内、身長は身体発育の最も基本的な長育の発育指標であり、体重は身体の発育を総括した指標である。特に体重は身長に比べ後天的な影響を受ける度合いが大きく、生活様式や運動、栄養などの影響を受けやすいとされている。対象者についてみると、身長は経年に従い直線的な増加をし、体重は4歳児より5歳児の増加率が大であり、同年齢での性差はみられなかった。身長や体重は平衡系、移動系、操作系のいずれの運動遊びにも影響し、特に身長の影響は大きいといえる。

身長や体重の地域差は同一地域内ではみられない<sup>10)</sup>が地域間ではみられ<sup>11)</sup>、肥満出現率は大都市に比べ農村に多く幼稚園児より保育園児が多い<sup>12)</sup>といわれているが、対象者にはその傾向がみられなかった。その理由は明確ではないが、対象地域の食生活を含む生活全般の都市化傾向が影響しているのかもしれない。

周育は全体的に同年齢の場合、男児より女児が大きく、部位別では胸囲は女児に比べ男児が大きく、女児が大きいのは大腿囲、上腕囲であり、腹囲、臀囲、下腿囲には性差がみられなかった。全国レベルでの調査では胸囲を除いて周育各部位に性差はみられないとする見方が多く、対象者にみられた性差は地域差に係わる諸因子が関係していると考えられる。周育各部位間の関連では臀囲、大腿囲と高い相関を示す部位が男女児とも多く、この部位の発達は幼児期における体格、体型の形成に大きく影響しているといえよう。全体的にみると軀幹部周育の発達は平衡系や移動系の運動遊びに、上下肢部周育は移動系、操作系の運動遊びに影響すると考えられる。

胸囲は呼吸、循環器機能を間接的に知る重要な指標であり、男児では個人差が大きい。個人

や性による優位な傾向は移動系の持久的な運動遊びに影響し、体質、栄養、体型の判定指標である腹囲、および大腿上部筋群や大腿筋の発達に関係する臀囲は平衡系や移動系の運動遊びに影響すると考えられる。

骨、筋肉や内蔵諸器官の発達を除脂肪体重から推定すると、除脂肪体重は経年に従い増加し、体脂肪量は減少する傾向にある。病的な肥満児、るい瘦児を除いて体重の年間発育量が多い者は、体脂肪量の増加ではなく筋組織、骨組織や内蔵諸器官の重量増加による場合が多いといえる。体格、体型を左右し行動力にも影響する皮下脂肪厚については、先天的要因に加え後天的な生活環境が影響するが、全体的にみて女兒は男児よりやや高い値を示し、3歳児が最も厚く経年に従って減少しながら5歳以降は安定する<sup>13)14)</sup>。性差でみると、胸囲を除く周育各部位で女兒が大きいのは皮下脂肪の沈着がすでにこの時期から著しいのではないかと<sup>10)</sup>と考えられる。皮下脂肪厚については経年変化量や個人差の傾向からみても男児に比べ女兒が大きく、且つ活発に変化している様子がうかがえ、周育各部位の男女差は皮下脂肪厚の影響が大きいといえる。

幼児期における体格・体型を体育指導からみた場合、肥満、るい瘦を含めた体格・体型は自らの行動力を高める積極的な側面と行動力を自ら制限する消極的な側面をもち、体格・体型によっては両側面を内包していることから、肥満傾向児、るい瘦傾向児を含め、個々の得意な運動パターンを軸に行動力を高める指導法をみつけ指導に当たることが重要であろう。

### 運動能力の特徴と体育指導

幼児期における運動能力は、経年的にみて直線的な発達とともに個人差は減少し男児優位であり、運動能力テストは種目により地域差がみられ<sup>15)</sup>、筋力に関係がある全身的な運動は身長との相関が高い<sup>16)</sup>ことが一般的に指摘されている傾向である。

内容別にみると投運動能力は男児が優位であり<sup>17)</sup>3歳から7歳半にかけて急激に発達し、女兒では顕著な発達はみられず、経年に従い性差は拡大する<sup>17)18)</sup>。この理由は、投運動は上肢と上体筋群の協応的筋力による<sup>16)</sup>ものであり、この時期の協応性の発達は男児は直線的な増加をし、女兒は顕著な発達がみられない<sup>19)</sup>からであろう。跳運動能力は女兒優位の傾向にある<sup>20)</sup>とする判断と、性差はほとんどない<sup>3)</sup>とする判断があり一致しないが、これは、前述の地域差等が原因しているのかもしれない。また、瞬発力、動的筋持久力、敏捷性は他の運動能力に比べ男児優位であり、早い時期から発達することについての指摘は多い。

対象者の結果からみると、移動系の運動遊びに影響する走運動能力は直線的に増大する。これを経年的にみると、4歳児では性差はみられないが個人差が大きく、経年とともに次第にその差は減少し、5歳以後は男児優位の傾向が著しくなる。加えて、男児では下肢部周育の発達と走運動能力との間に相関がみられた。操作系の運動遊びに影響する投運動能力と移動系の運動遊びに影響する跳運動能力は4歳から5歳にかけての伸びが大きく、走運動能力と同様に男子優位の傾向であった。女兒では5歳から6歳にかけての伸びの停滞がみられ、経年とともに男女間の差と個人差が大きくなる傾向にあった。加えて男女児とも上下肢部周育の発達との相関が一部にみられた。しかし、跳運動能力の性差や個人差は脚筋力の発達差によるものではなく、膝の屈伸、腕の振り等の調整力的な能力差による<sup>21)</sup>とする指摘もある。移動系の運動遊びに相当する熊あるきは男女児ともほぼ直線的に増大し、男子優位で個人差は経年とともに少なくなる傾向にあった。平衡系の運動遊びに相当する横転がりは視覚と結びついた全身協応性であり<sup>22)</sup>、全身協応性はいずれの年齢においても男児優位である<sup>20)</sup>とする指摘のように、対象者にお

いても経年とともに発達し、女兒では5歳から6歳にかけて伸びの停滞がみられるものの男児優位であった。

運動能力を体型からみた場合、痩せ型が肥満型より運動能力が優れているとみられることが多い。しかし、体型を肥満型、肥満傾向型、普通型、痩せ傾向型、痩せ型の5タイプに分けた場合、肥満型が他の4タイプに比べ明らかに劣っているのは移動系の熊あるきのみである。それも5歳後半から6歳前半の男児のみにみられた傾向である。熊あるきは調整的能力が総合的に要求される動きであるからであろう。

5タイプの両端にある痩せ型と肥満型の比較では、前者に比べ後者が劣る傾向はテスト種目、年齢、性等により違いがある。年齢と性からみると、4歳後半から5歳前半にかけて男児は操作系のボール投げ、移動系の立幅跳びで肥満型が劣り、5歳後半から6歳前半にかけては男女児とも移動系の20m走、立幅跳び、熊あるきで肥満型が劣る傾向にあった。また移動系の連続片足跳びは、痩せ型と肥満型の間では個人差が大きく、有意な差はみられなかった。

全体的にみて肥満傾向型や肥満型は操作系の運動は優れているものの、移動系の跳運動や熊あるきのような調整力を要求される運動は、他のタイプに比べ、明らかに劣っていないものの、差があり、且つ、経年とともに移動系の運動能力は低下する傾向にあった。加えて、肥満が運動能力に及ぼす影響は男児より女児が大きかった。このような傾向は、中学生にもみられる<sup>23)</sup>とする指摘があり、肥満が運動能力に及ぼす影響はすでに幼児期から始まっているといえる。

幼児期における運動能力の発達は環境、運動遊びの質や量の影響に加え、固体差を内包した身体的諸条件（体格・体型・筋肉発達等）が影響するが、それだけでは規定できない面も多い。発育・発達段階では、身体の完成前に神経系が先立つことは衆知のことであり、幼児期は神経系機能の発達に比べ循環、呼吸、筋機能の発育はきわめて未熟であるといわれている。これは、この時期における運動能力の発達には神経発達への依存度が大きいことを意味している。これらのことからこの時期における体育指導は、神経発達を促す発達段階に応じた運動遊びの指導により、遠く、早く、長くよりも、いかに多くの運動パターンを習得、習熟できたかにかかっているといえる。とくに肥満体型の幼児には、調整力の発達を促す運動遊びの指導が必要であろう。また、後天的な影響因子や質や量で変わる運動能力の獲得には、指導者の幼児に対する見方や運動能力に対する考え方、等が強く影響するといえよう。

### 遊び環境の特徴と体育指導

幼児にとって遊びが重要であることは多くの識者によって強調されるなかで、遊び空間・遊び仲間・遊び時間の減少など幼児を取り巻く遊び環境が悪化していることは周知の事実である。我が国におけるこれまでの遊び環境に関する研究は、大都市部或いはその周辺都市を対象にしたものが多い。これは、急激な環境変化が都市部において顕著であったからである。しかし、最近の現状をみると、その変化は地方の中小都市やその周辺町村にまでおよんでいる。

都市化現象を対象地域でみると、大・中、都市部に比べまだ自然的空間が多く、環境的には良好であるといえるが、市の中心部や周辺部は宅地の団地化や工場の進出により、遅々ではあるが農村地域としての顔を変えつつある。

前述したように、幼児期における体育指導の基本は幼児の行動力を高めることにある。これには保育園や幼稚園だけが担うものではなく、幼児の家庭での生活全般、なかでも帰宅後や休

日の遊び環境が重要な役割を果たすことはいうまでもない。これらのことから、遊びについて体育的視点によるアプローチも数多くなされてきた。それは幼児の遊びと運動・スポーツが切り話せない関係にあるからであるといえる。

遊びに関するこれまでの調査研究では、遊びは時間、空間、仲間によって規定されるとするのが一般的である。そこで対象者の園からの帰宅後および休日の遊びについて保護者の評価を分析検討した<sup>6)</sup>。その結果からみると、遊びの量では約60%がよく遊んでいる、約25%がもっと遊んだ方がよいと評価している。

屋外遊びの量についてみると5歳児が3歳児、4歳児に比べ多く、特に男児にこの傾向が著しい。これは、前述の運動能力の発達が著しい年齢および性と合致する。

遊び場については自宅屋内、自宅屋外が多く自宅を中心とした場所が好まれ、性差や年齢差はみられなかった。屋外の遊び場は経年に従い公園や広場で遊ぶことが多くなる傾向にあった。なかでも公園で遊ぶ者は多く、身近な遊び場になっているといえよう。公園は遊び場として整備された人工的な空間であり、安全面からみても安心な場所であるが、規模の大小、施設、遊具の充実等からみて、幼児の運動能力発達に寄与していると言い難い場所もある。最近では幼児が自主的、自発的に遊び、好奇心や自然欲求を満足させることができる可変的で柔軟な構造を持つ公園の考案・創造などが進んでいる<sup>24)</sup>が、このような公園は地域により偏りがあり、行政を含めた今後の課題であろう。

空き地で遊ぶ幼児は対象者全体からみると多くはなく、対象地域の子供が遊べる自然的空間が減少しつつあるのかもしれない。空き地を遊び場としている者は女児に比べ男児が有意に多く、特に5歳児に多くみられた。男児の遊びは遠征型、開拓型が多い<sup>25)</sup>との指摘のように、空き地などの未整備的な空間を求めて移動する傾向にあるのかもしれない。なお、対象者の中に僅かではあるが山、川、田畑等自然地そのものを遊び場としている者があった。これは対象地区の環境差によるものと考えられる。

幼児を対象に遊び集団の構成員を詳しくみたものはほとんど見あたらないが、遊び仲間については小集団化の傾向にあるとみる<sup>26)</sup>のが一般的であろう。対象者の3歳児では1人遊びを好む傾向にあり、経年に従い集団構成員が増え、女児は1人～2人、男児では3人～5人の構成が多く、男児の方が多人数の遊び集団を形成する傾向にある。遊び仲間と屋外遊び量の関係では、集団構成員の数が多くなるほど遊びを否定する型や屋内遊び志向型が減り、屋外遊び志向が増える<sup>26)</sup>とする指摘のように、対象者にも遊び仲間が多くなると屋外遊びも活発になる傾向にあった。また、遊び仲間と遊び場との関係では友人が少ない園児は、戸外で遊ぶことが少なく、室内遊びの多い園児は友人が少ない<sup>27)</sup>との指摘のように、対象児も遊び仲間が多くなると遊び場を自宅周辺以外に求めている。

遊び相手については経年に従い保護者が減少し、近所の友人との遊びが活発化し遊び仲間も増える。そして、遊びの内容は自転車乗りが各年齢層とも多く、なかでも5歳児が他の年齢に比べ有意に多かった。加えて、5歳の女児では砂遊び、水遊び等の比較的静かな遊びを好む者が男児より多く、この時期の運動能力の発達にみられる性差と無関係でないといえる。

これらのことから対象者の遊び環境は、全般的に遊び仲間が多くなると遊び場も多様になり、屋外の遊びの量も増え、遊びの種類も多くなる。そして、遊び仲間、屋外遊び、遊び場、遊びの種類は量的に同調する傾向にあるといえる。また、男児は女児に比べ運動量の多い遊びをする傾向にあること、伝承的遊びは都市部同様に消滅状態にあること、遊び内容はどこで遊ぶか

という場の問題および運動能力の年齢、性による発達の特徴と密接に関連していること、等がわかった。

体育指導からみた幼児の遊び環境は、安全性に配慮しながら、工夫された人工空間や自然的空間で、多くの仲間と自由に多様な遊びにより欲求を充足することができるよう指導者が配慮する必要がある。加えて、保護者に対し幼児の遊びに関する情報を提供し、協力を求めることも重要であろう。

#### 4 ま と め

新潟県南西部に位置するA市(人口約3万人)の保育園に通う4歳児から6歳児(276名~895名)を対象に体格、体型、基礎運動能力、遊び環境、等を横断的、縦断的に調査し、その分析結果から、幼児期における発達・発達の適時性に合致した体育指導の基本的な考え方について検討し、次のような知見を得た。

1. 運動遊びは個々の活動を大切にしながら、行動力を高める指導が大切である。
2. 体格・体型は自らの行動力を高める積極的な因子と行動力を制限する消極的な因子を持っていることから、個々の得意な運動パターンを軸に行動力を高める指導が大切である。
3. 運動能力の獲得は、指導者の幼児に対する見方や運動能力に対する考え方が強く影響する。
4. 遊び環境は安全性に配慮しながら、工夫された人工的空間や自然的空間で、多くの仲間と自由に多様な遊びができるよう援助することが大切である。

#### 引用参考文献

- (1) 青柳 領 他「幼児の運動能力構造について」体育学研究, 26-4:291-303, 1982.
- (2) 松浦義行 他「基礎運動能力の発達に関する研究」-4~8歳の男児について-体育学研究, 21-5, 293-303, 1977.
- (3) 砥堀雅信 他「幼児における体位と基礎運動能力について-その1 年齢差, 性差, 個人差の検討」上越教育大学研究紀要, 8-3:77-89, 1989.
- (4) 砥堀雅信 他「幼児における体位と基礎運動能力について-その2 体位と皮下脂肪厚の検討」上越教育大学研究紀要, 9-3:135-147, 1990.
- (5) 砥堀雅信 他「幼児における体位と基礎運動能力について-その3 周育と運動能力の検討」上越教育大学研究紀要, 10-3:279-286, 1990.
- (6) 永木耕介 他「幼児の遊び環境に関する調査研究-新潟県A市の保育園児を対象として-」上越教育大学研究紀要, 10-1:299-308, 1990.
- (7) 砥堀雅信 他「幼児における体位と基礎運動能力について-その4 体脂肪率と運動能力の検討」上越教育大学研究紀要, 11-1, :293-300, 1991.
- (8) 砥堀雅信 他「幼児における体位と基礎運動能力について-その5 年間発達・発達量の検討」上越教育大学研究紀要, 13-2:1-8, 1994.
- (9) 小林倫子 他「子供と運動遊び」不昧堂出版, 1991.
- (10) 保志 宏「からだの性差」保育学読本, からだの科学, 増刊14, 56-59, 1982.

- (11) 高野 陽「幼児期の発達の特徴」新育児読本, からだの科学, 増刊3, 43-48, 1985.
- (12) 高石昌弘「からだの成長と発達」保育学読本, からだの科学, 増刊14, 14-18, 1982.
- (13) 高石昌弘「健全育成の立場からみた幼児の肥満(傾向)の実態とその対策に関する研究」小児保健研究, 40-3:288-298, 1981.
- (14) 高野 陽 他「幼児の皮下脂肪厚に関する研究」小児保健研究, 40-6:522-529, 1981.
- (15) 勝部篤美「幼児の運動能力についての12章」体育の科学, 22-6:374-378, 1972.
- (16) 原田碩三「幼児の体格と運動能力ーその新しい評価法と指導」北王路書房, 1977.
- (17) 宗高弘子 他「幼児の運動能力の地域差について」体育学研究, 16-2:91-97, 1971.
- (18) 宮崎義憲 他「幼児の跳躍動作における協応性の発達に関する分析的研究」体育科学, 12:97-106, 1984.
- (19) 岸本 肇 他「幼児の運動能力の発達に関する一考察」体育学研究, 25-1:47-57, 1979.
- (20) 日本私立幼稚園連合会編「改定日私式幼児運動能力検査法」日本私立幼稚園連合会, 1977.
- (21) 松浦義行「体力の発達」朝倉書店, 1982.
- (22) 松田岩男 他「幼児の運動能力検査に関する研究」東京教育大学体育学部紀要, 7:33-45, 1986.
- (23) 村田光範「肥満児と体力」小児科 MOOK, 29:84-98, 金原出版, 1983.
- (24) 藤本浩之輔「子供の遊び空間」日本放送出版協会, 1974.
- (25) 井上健治「子供の生活時間と遊び」東京大学教育学部紀要, 13:1-13, 1973.
- (26) 丹羽 昭「子どもの運動遊びと社会性の発達」体育の科学, 332, 1981.
- (27) 中川美子「幼稚園児の日常生活について」愛知県立大学文学部論集, 36:93, 1987.



## A Study on Relevance between Instruction and Playing Activity in Pre-school Children

Masanobu TOHORI \* , Ryosuke TSUCHIDA \* and Kosuke NAGAKI \*\*

### ABSTRACT

It is fundamental in physical education instruction to enhance motor ability. Motor ability which acquired in infancy affect for the rest of one's life. It is true that many of motor ability in infancy are gained in "playing activity". And we can measure their quantity and quality by observing activities and taking the test of motor ability. Motor ability show linear increase with aging in this term.

However,

- 1) Development of children doesn't specialize by four years old.
- 2) Physique affects motor ability stronger in younger age.
- 3) There is a correlation between quantity and quality of playing activity and physique, or motor activity in daily life.

Observing activities and taking the test of motor ability, we have to take child's life as a total one which consists of physical characteristics, environment surrounding children.

And it is important for children's healthy life in the future to do physical education instruction from the points of view.

In this paper, we investigated physique, body type, fundamental motor ability, environment at play ground about 276~895 pre-school children( 3 ~ 6 years old).

The results are as follows :

- 1) It is important for instruction of playing activity to enhance motor ability as we think about significance of each activity.
- 2) Physique and body type have two factors, One is to enhance motor ability and another is to restrict it. Therefore, instruction to enhance motor ability based on each child's favorite motor patterns.
- 3) Instructor's way of thinking against pre-school children and motor ability strongly affects acquisition of child's motor ability.
- 4) The point of instruction is to help children playing diverse activities freely with friends in a planed space.

---

\* Division of Physical Education, Home Economics and Technology Education :  
Department of Health and Physical Education

\*\* Hyogo University of Education : Center for Skills Training